

ニクラウスの謎

生命科学科 1 年 渡邊さゆり

教材ソフト：ホフマン物語 2004 年 マチェラータ音楽祭

ホフマン物語において、どの幕にも登場していたニクラウスの存在が不思議に思えたので、この物語におけるニクラウスの存在について考えていきたい。

まず、ニクラウスは冒頭で、ホフマンを幸せへと導くためにやって来たと言っている。しかし後のどの幕を見てもホフマンは、とても幸せになっているとは思えない。むしろニクラウスがやって来たことによって、不幸が続いているのではないかと考えられる。

第 1 幕ではまず自動人形のオランピアに恋をするが、オランピアは壊されてしまい、ホフマンは人形に恋をしてしまった自分を酷く恥じ、悲しみに暮れる。第 2 幕では歌い続けると死んでしまうアントニアに恋をするが、アントニアはミラクル博士などの手によって、歌い続けてしまい、死んでしまう。第 3 幕では高級娼婦のジュリエッタに恋をするが、騙されて、自らの影も奪われ、恋に破れる。この様にホフマンは、補佐役のニクラウスがいながらも、不幸が続いてしまっている。また、ニクラウスはホフマンが危ない橋を渡ってしまいそうになっているまさにその時に、なかなか居合わせていない。後にホフマンが悲しみに暮れているところで、それを慰めるかのように登場する。ホフマンにそれは危険だと言うことを知らせる時も、なかなかストレートに言うことはない。これらの行動を見ているとニクラウスは、ホフマンを幸せを導く役割を果たしているとは思えない。しかし、ホフマンに対していつも味方であることを示している。このことから、ニクラウスは、ホフマンに好意を寄せているのではないかと考えた。そうだとすると、ホフマンが他の女性と恋に落ちてしまいそうになれば、それを妨害するように働くのではないだろうか。実際に、ホフマンの恋を妨害しているシーンはないが、その様に考えるとつじつまが合ってくる。オランピアの幕では、「時計仕掛けのにわとり」の歌をうたい、その女性はやめておいた方が良いと警告している。アントニアの幕では、「歌手なんてヴァイオリンと同じさ」と歌い、ホフマ

ンに諦めさせようとしている。ジュリエッタの幕では、娼婦なんかに惚れるなよ、などと警告している。

ニクラウスは、自分にホフマンが恋をすることで、ホフマンを幸せにすることができるかといっていたのではないだろうか。そう考えれば、ホフマンを幸せにするためにやって来たと言っていたことも、ホフマンが助けを求めているような瞬間に居合わせないことも理解できる。ただ、ニクラウスがホフマンに好意を寄せているのだとしたら、なぜ純粋にホフマンの幸せを願わないのだろうかという疑問がわいてくる。好きな人に幸せになってもらいたいと考えるのは、当然であるように思える。

私の考えるニクラウスは、幸せになってもらいたいと考えるのは他と同じだが、その実現方法が異なるのではないだろうか。ニクラウスは、他人とではなく自分と幸せになることが、相手にとっても幸せであると思っているので、純粋にホフマンの恋を応援することはしないのではないだろうか。実際、ホフマン物語で出てくる3人の女性は、皆ホフマンを悪い方向へと導く要素を持っている（オランピアは機械の人形なので、恋など出来ない。アントニアは早くに死ぬ運命にあるので、恋をしても悲しみに暮れるだけ。ジュリエッタは、クレスペルにホフマンをだますように言われて行動してただけで、恋愛感情はなかった）。となると、ニクラウスはやはりホフマンを悪魔（3人の女性）から救うためにやって来たのかもしれない。